坂口安吾 桐生通信(さかぐちあんご きりゅうつうしん)

坂口安吾は、昭和29年(1954)3月から月に一回、読売新聞に「桐生通信」という連載のエッセーを発表しました。桐生での出来事、風物などを紹介したものですが、社会批評にも通じるものでもありました。映画館、野球、お祭り、本町通りなど、安吾ならではの風刺を交えての文章でした。　その中から少しだけ紹介します。

私の住む本町二丁目はこの都市ができた時からの中心地で、そこの横町は四百年前からの歴史ある横町だから、そこにある北小学校だけは広い校庭をとる余地がなかったらしく、他と比較してここの生徒が気の毒なほど特別に小さい校庭だ。
しかし、それですら他の都市の小学校に比べれば小さい校庭とはいえない。
立派に運動会をひらくこともできる。

…カラッ風と商魂と浮き沈みを生きぬく力が町の魂のような桐生も、実は案外女性的な町だ。織姫の町で、女の力が金銭的に主役であるというばかりでなく、織物業という浮草家業の性格が本質的に女性的なのである。景気不景気の変動が激しく、浮き沈みがはなはだしい。それを生きぬく力が女性的なのだ。男はヤケ酒をのんだり自殺したりするが、女は平然と生きぬく力がある。その女の力が男の力よりも勝っているのが桐生である。

(「インターネットの図書館　青空文庫」より引用)

曽我家住宅

曽我家住宅(そがけじゅうたく)

建築年:明治後期頃
(国登録有形文化財)

曽我家の初代助松は石川県鹿島郡の生まれで、明治27年(1894)に桐生に来往し、生糸商に奉公しながら商売を習得。その後、糸相場で財をなして現在地と建物を大正6年(1917)に購入しました。

建物は敷地の北側に立ち並び、東から西に主屋、土蔵、新座敷と続きます。

主屋は南面して建つ木造平屋建の町屋で、屋根は本町通り側一面のみ寄棟造の切妻造で桟瓦葺です。北面は防火壁で蔵造となり白漆喰塗です。

店は街路に面する東側に格子窓を設け、南側下屋に玄関を開いており、本町通りに玄関を設ける一般の町屋とは異なった意匠となっています。